スペイン戦争中のアナキズム

読者は、一九三六年のスペイン革命を、その社会建設の諸経
験、当時共同体（コレクティビダド）と呼ばれ、今日ではわ
れわれが自治管理と名づけているものの視角から、すでに（八
七ページ以下で）知っておられる。

残されているのは、内乱へのアナキストたちの政治的軍事的
参加に関する、いくつかの文書を提示することである。それら
の記録の若干は、一九一九年から一九三六年七月十九日の革命
の勝利にいたる時期に関するものである。そこにはすでに、ス
ペインのアナルコ・サンジカリズムとポリシエヴィズムとの間
の紛争が姿を見せている。ついで、偉大なゲリラ、プエナベン
トゥーラ・ドゥルルティイが紹介されよう。彼は、彼自身の表現
によれば「同時に革命と戦争とを遂行した」。読者はそうして、
スペイン絶対自由主義者たちの、自律と革命戦争との、あまり
にも知られていない観念を知ることができよう。ドゥルルティ
イは、もう一人のマフノーであった。しかも彼は、パリに亡命中
のこのロシアのゲリラと会って、その口を通じてマフノー
の教えを受けることができたのである（二四七ページを見よ）。

最後に、アナキストたちの政府への、事実、二つの政府、カ
タルニャ地方の（自治）政府と、まずマドリッドに、ついでバ
レンシアに樹立された（中央）政府への、参加が想起されよ
う。この参加は、いうまでもなく、「非政治的」なアナキズム
の基本的諸原則と矛盾していた。それは、絶対自由主義者たち
の間ですら、激しい議論の的となり、それは今日でも完全には
終わってはいないのである。

一九一九年から一九三六年までの
スペインにおけるアナキズム

CNTと第三インターナショナル

以下の諸文書は、社会革命についてのポリシェヴィキ的な観念とアナルコ・サンジカリスト的な観念の間には、つねに越えたい溝があったわけではないことを、われわれに教える。勝利をえた、しかし世界的な反動によって全面から脅威にさらされていた、若き十月革命の威光がその頂点に達していた時、スペインの全国労働連合(CNT)は、蝶のように光に惹かれて、少なくとも暫定的な資格で、モスクワにおける、共産主義者インターナショナルの仕事に参加することを決定した。しかし、かなり速やかに、見解の基本的な相違が明らかになり、ロシアのポリシェヴィズムは次第にセクツ的な支配者の支那を見せるようになり、やがて断層が生ずることとなった。

この変化が、ビエール・モナットふうの、フランスのかなり革命的サンジカリストの変化と並行していたのは、注目すべきことである。彼らは、モスクワに臣従の誓いをしたのち、かなり素早く、誤ちをしたと見え、クレムリンに対してもフランス共産党に対しても、永遠に離反したのであった。

クリーニンによって主張された諸原則の確固とした擁護者である、と宣言する。連合はまた、第三インターナショナルに、優勢なその革命的性格のために暫定的に加盟し、真の労働者たちのインターナショナルを支配すべき諸原則を樹立しなければならぬ、スペインでのインターナショナル大会の開催を期待するものである、と宣言する。

……アンヘル・ペスターニャは、第三インターナショナル第二回大会に出席し、連合大会によって可決された諸決定を知らせるために、ロシアにゆくことを委任された。

共産主義者インターナショナル第二回大会 (一九二〇年六月)

アンヘル・ペスターニャによる

第三インターナショナル第二回大会は、一九二〇年六月二十八日から、モスクワにあるその本部で始まった。まず第一に、ジノヴィエフが、スペイン連合を第三インターナショナル執行委員会のメンバーとして認めることを提案し、それは承認された。

同志ロゾフスキーは、ついで、革命的労働組合インターナショナルを組織することを提案した。そのために、以下のことを表明する文書を読みあげた。「交戦国の大多数においては、大半の労働組合が、戦争の苦しい数年

一九一九年十二月のCNT大会

CNT全国大会は、マドリッドで、一九一九年十二月十日から十八日まで行なわれた。そこでは、三つの主要な問題が論議された。すなわち、スペイン・プロレタリアートの諸労働組合中央の合同(三二五、九五五票対一六九、一二五票、棄権一〇、一九二票で拒否)、産業全国諸連合にもとづく組織の新機構(六五一、四七二票対一四、〇〇八票で否決)、自由共産主義諸原則の宣言(発声により満場一致で可決)である。

しかし、最も重要な討議は、ロシア革命に対してとるべき態度についての討議であった。たくさんの方々が提案された。

「ロシア革命を援助するため、……資本主義諸国家の……封鎖を回避するため、どんな手段を用いるか」
「第三労働組合インターナショナルに加盟する必要があるか」

「連合はインターナショナルに即時に加盟すべきか。しかし、どれに」

「スペインでインターナショナル大会を開催することは有益か」

多くの報告が認められたが、その中に次のものがあった。

「全国労働連合は、第一インターナショナルにおいて、

の間、中立主義(非政治主義)の信奉者であった。それらは、帝国主義的資本主義の奴隷であり、労働者の解放を遅らしつつ、不吉な役割を果たした。……ブルジョアジーの独裁に対して、決定的な過渡的な唯一の手段として、搾取者たちの抵抗をゆるがし、プロレタリアートによる権力の制覇を確保し強化しうる唯一のもの、プロレタリアートの独裁を対置すべきであった」

それにしたがって、大会は以下のことを決定した。
「既存の労働組合組織から前衛分子を追いだそうとするすべての戦術を非とすること、そして、反対に、労働運動の指導部から、戦争を受け入れつつブルジョアジーと協力した日和見主義者を徹底したやり方で排除すること。」

「……全世界の労働組合組織の中で、最終的にはその見解を強制する共産党細胞を各組織内に創設しつつ、組織的な宣伝を続行すること。」

「……労働組合運動の転換のために、国際的な闘争と行動の委員会を創設すること。この委員会は、大会において設定される諸条件の下で第三インターナショナル執行委員会と協力する、労働組合国際評議会として機能すること。この評議会は、すべての加盟各国労働者組織の代表によって構成される」

私の発言に当たって、私は次のように述べた。「文書の三つの点を、素早く、具体的に、検討してみることにする。というのも、私が代表している組織は、この文書

とは全く相違した立場をとっているからである。その三つの点とは、

非政治主義、権力の制覇、プロレタリアートの独裁、である。

「……実際、非政治主義は、この文書の中では、若干の労働組合組織によって非難されている。それに反して、帝国主義戦争に参加したほとんどすべての労働組合組織は政治化していた。それは、この文章が確認しているものと反対である……したがって、この文書の論理性はどこにあるのか。権力の制覇とプロレタリアートの独裁にかかわる、残されている二つの点、……私がここで代表している連合がこれら二つの問題について考えていることをのべるには、僅かな言葉で足りる。私はこのことについて、昨年十二月中旬にマドリッドで行なわれた連合第一回大会で、最終目標は自由共産主義の樹立であることが、出席した五百人の代表の満場一致で決定されたことを、諸君に想起させたい。

「……私はさらに、政治化した共産主義プロレタリアートとの緊密な協力を説いた条項について、二言つけ加えたい。

「連合は、資本主義制度と闘うあらゆる革命的組織と協力することを受け入れる。しかしながらそれは、それが望ましいと思われる時にそうするという権利を留保しながらである。事実私は、連合が、その行動の自由を危険にさらして行動することを受け入れるとは思われない」

し、前もって次の通告をするであろう、と述べた。

「政治権力の制覇、プロレタリアートの独裁、共産主義的な政治的プロレタリアートとの協力にかかわるすべては、私がスペインに帰り、連合委員会がこの大会の際に決定されたすべてを知った時に連合がとるであろう、今後の決定にしたがうものとして留保されている」

全世界の労働組合組織に向けられるはずの、招請状についても同様であった。この招請状には、革命的階級闘争を受け入れる、職業的な、全国的、国際的な労働組合組織、地区的、地域的な同盟が、会議に出席するよう招かれており、と示されていた。

私は、……この招請状……にも同意ではなかった。それは、会議に出席することを望む、しかし、独裁と権力の制覇に同意しない多くの組織に道をとぎしていた。そこに、私の意見では、誤りがあった……。

《無言劇》大会

ベスターニャは、共産主義者たちは、プロレタリアート独裁に関する文書の内容修正に同意した、と断言している。しかし、スペイン代表の一次的な不在の間に、文書はベスターニャの署名を伴う原文のまま公表された。大会そのものの進行については、ベスターニャは、議長のパスト任命をめぐって起きた紛争が彼の全注意を惹いた、といっている。しかし、彼はむしろ、大会その

第一節と第二節は、いかなる議論の対象にもならなかった。第三節についての討論の過程で、私は、われわれは非政治的である、われわれはあらゆる手段で戦争と闘うべきである、われわれの行動とわれわれの原則を非難する文書に署名するのは、奇異なことである、と再確認した。この節の文章の修正が、最終的には認められた。

第四節は、長い討論の原因となった。というのも、組合の完全な自治の原則を支持する、われわれ何人かがいたからである。結局、果てしない討論の末に「文書は、出席七代表のうち五代表によって署名された」

私の立場は、連合が第三インターナショナルに加盟していたので、きわめて微妙なものであった。私は、インターナショナルによって認められた文書を否認できなかった。私はだから、多数にしたがわねばならなかった。

……しかしながら私は、この文書への署名の際、慣例である全国労働連合《を代表して》アンヘル・ベスターニャと書くかわりに、全国労働連合《の》アンヘル・ベスターニャ、と書いた。私は、そうして私の責任をのがれた。発言を求められた時、私は、代表たちはすでに、権力の制覇とプロレタリアートの独裁に関して反対である私の考え方を知っている、この立場の保持は、私の個人的な見解を表明するものではなく連合の見解を表明するものである、ことを想起させた。

したがって私は、多数が文書をそのまま認めることを私に強いるなら、私はそれに署名するであろう、しか

ものが無言劇であることを理解していた。議長は、規則をはかり、気儘に諸提案を修正し、議事日程をくつがえし、自分の発意で諸提案を提出していた。大会を操作するそのやり方は、完全に度を越えていた。たとえば、各代表の発言は十分を越えてはならなかったのに、ジノヴィエフは一時間半もの演説をしたのである。

ベスターニャは、この演説に反駁しようとした。しかし、彼の発言は、手にした時計が十分になると、議長によって打ち切られた。その同じベスターニャが、トロツキーによる、四十五分以上もの別の演説の中で批判された。ベスターニャが彼に向けられたトロツキーの攻撃に反論を申しでた時、議長は討論打ち切りを宣告した。彼はまた、報告者任命のやり方に抗議しなければならなかった。理論的には、各代表が提案をすることができた。しかし、議長は《興味あるもの》を彼自身で選んだ。

〔代表団または代表による〕比例投票が予定されていたが実施されなかった。ロシア共産党は、自分にとって好都合な過半数を確保していた。

ほどの極みは、重要ないくつかの決定が、大会議場ではなく、舞台裏でなされたことである。そんなふうにして、以下の文書が可決された。「第三インターナショナルの今後の世界大会においては、その加盟者である各国労働組合組織は、各国共産党の代表によって代表される」

この決定への抗議は簡単に無視された。ベスターニャ

は、アルマンド・ボルジ²と所感の簡潔な交換をしたのち、一九二〇年十二月六日にロシアを離れた。ボルジは……イタリア労働組合同盟の代表で、不幸な経験に失望してイタリアに帰った。しかも、モスクワを離れる前に、両者は、赤色労働組合インターナショナル組織のための回章のことを知った。もし、将来の第三インターナショナルの大会において、労働組合組織に対する共産党の優越が確保されるとしても、労働組合インターナショナルにおいては、加盟各労働組合中央部にとって制約のないものとなろう、と彼らは想像していた。しかし、赤色労働組合インターナショナルというこのいまわしい計画は、まったく反対のことを証明した。この計画は次のものを含んでいた。

「1 特別委員会が、共産党によって各国に組織されなければならぬ。

2 この委員会は、赤色国際組織の回章と刊行物を受けとり、あらゆる労働組合組織に配布することを引き受ける。

3 委員会は、職業的・革命的な新聞編集者たちを任命し、敵のインターナショナルに対するインターナショナルの見解を彼らに教え込む。

4 委員会は、それ自身の手段をもって、干渉と論争に参加する。

5 委員会は、まったく別の機関である共産党と緊密な関係をもって活動する。

スペイン革命 1936

ファシズムに対し、ゼネストを！

(一九三六年七月十九日)

カタルニャの民衆よ！ 立て！ 戦いの準備を整えよ！ 行動の時は来た。われわれは、ファシズムを批判し、その欠陥を非難し、胸のむかつくような独裁を強制しようとする。スペインのいまわしい反動に対して、来るべき時に民衆が蜂起するための、スローガンを放ってきた。幾月も過ぎた。カタルニャの民衆よ、その時は来た。反動（軍人、民間人、司祭、大銀行）は、皆、手に手を結び、軍事的独裁の手を借りて、スペインでのファシズム樹立を目指している。われわれの革命的、反ファシストの指導方針とともに首尾一貫した、カタルニャにおける、われわれCNTの真の代表者たちは、この重大な時期にためらうことはできないし、誰かが蜂起したその瞬間から、ゼネラル・ストライキの合言葉にしたがうことを、全員にはっきりと指令する。しかしながら、それはスペインのいかなる地方においても、

6 委員会は、国際組織の問題を討議する討論会を招集するのに寄与し、宣伝に適当な演説者を選ぶ。

7 委員会は、共産主義者びいきの同志たちによって構成される。選出は共産党によって監督される。

8 この方法が採用されえない国々は、共産党の密使が似たような組織創設のために派遣される」

全国委員会の命令を守りながら行なわれる。われわれの立場は、はっきりと確立されており、われわれは諸君に、われわれの合言葉はきわめて素早く発せられる、と予告しておく。われわれは、委員会から出されたものではない合言葉に、誰もしたがってはならない、と訴える。それは取り返しのつかないことを避ける唯一の方法である。われわれは、重大さに満ちた時に直面している。われわれは、精力的に、確固として、いっしょに行動しなくてはならない。誰も孤立しないように！ 皆が相互の接触を保つように！

今こそ、警戒をつづけ、行動に備える時である。ファシズムは、セビーリヤの町の主人となった。蜂起がコルドバで宣言された。北アフリカはファシズムに支配されている。われわれ、カタルニャの民衆は、戦いの準備を整えよう、行動に備えよう。われわれが敵に直面している今、各自が闘いの部署につくように。

無益な精力を使うな、兄弟殺しの闘いもするな！ 全力で闘おう、手に武器をもって防衛しよう、闘いに備えよう！ 行動しないものは、民衆を解放する立場を裏切るものである。CNT万歳！ 自由共産主義万歳！ ファシズムに対して、革命家たちのゼネラル・ストライキを！

CNT地方委員会

権力についての反ファシズム（一九三六年七月）

一九三六年七月十九日の軍部の反乱は、スペインの経済生活にとって深刻な結果をもたらした。聖職者と軍人一味に対する闘争は、労働者階級の援助なしには不可能であった。共和主義ブルジョアジーは、自分だけの力に委ねられて、意気銷沈していた。

労働者との同盟を、政治的な面にのみ限ることはできなかった。労働組合員たちとアナキストたちは、ブルジョア共和国について苦い経験を持っていた。したがって、彼らが聖職者と軍人の反乱を打ち砕くことだけで甘んじ、と考えてはならなかった。経済制度変革の準備を覚悟しなければならなかった。事実、彼らは、彼らの意見では、政治的抑圧の基礎である、経済的搾取を許容しつづけることはできなかった。

これらの事実は、聖職者と軍人の徒党と、以上の両者一味と結びついている、大資本家たちに知られていた。彼らは、勝負の賭金と、その結果とをよく知っているのである。

……そのために、特権階級は、反乱した軍事指導者たちの側に移った。

将軍たちが舞台で演じている時、大資本家たちが裏で操っていた。彼らは、舞台の奥にとどまっていた。彼らの一部は、作戦の場にもいなかった。ホアン・マルチ、

フランソワ・カインボ、その他の同類は、反乱が起きた時、スペインにいなかった。彼らは、外国で事件の展開を待っていたのである。もし反乱の指導者たちが勝利をえたなら、彼らの出資者たちは直ちに帰国したであろう。しかし、カタリニャでは、スペインの大部分と同様、軍部の反乱は粉砕された。そして、裏で操っていた人間たちは外国に残った。

……テロルによって古い特権を擁護しようである、軍人と聖職者とファシストの徒党のかけに身を寄せるか、それとも、武装をした労働者たちの保護に頼り、経済と公共事業の停止した部門を彼ら自身で組織し管理させておくか、選択は今であった。憎むべき反動の二年のうち、一九三六年二月の選挙で新たに権力の座についた、自由主義者と社会主義者の分野で、混乱が大きかったことはいうまでもない。しかし、いずれにせよ改革に熱心であった共和主義ブルジョアたちのためらいが、この態度は、過激分子の大胆さと決定的な対照を見せていた。

それは、歴史に新紀元を画す、スペインにおいても世界においても、何かしらまったく新しいことであった。ドイツでも、他の国々でも、労働運動の議会主義の泥沼への落込みと官僚主義的化石化は、独裁の登場を助長した。スペインでは、労働者全体と、議会主義的な手段およびブルジョア政治との不和が、民衆全体に将軍たちに

対し抵抗することを可能とさせたのである。第二の重要な確認。スペインでの進展は、重大な改革が一党独裁の支配的な空気の下行なわれたのではないという、社会的激動期への国の突入を、特徴としていた。変革は、反対に、経済過程への広汎な大衆の直接参加によって始まった。必要な取用の役割は、決定的な方法で社会主義的建設を惹き起こした労働組合によって果たされた。政治的な観点から見ると、第一に戦時の可能性と必要性の枠内で作りだされた新しい秩序は、国家権力の独占にもとづいていたのではなかった。それは、きわめてさまざまな、かつてはしばしば正反対であった、反ファシスト諸集団の民主的協力にもとづいていたのである。

FAIの宣言

一九三六年七月二十六日、FAIの（リベ）半島委員会は、ラジオを通じて以下の宣言を発表した。

バルセロナの民衆よ！ ファシズムに対する闘いに結集した、すべての労働者組織とすべての左翼諸派の、労働者たちよ！ バルセロナとスペイン全体が迎えている、この決定的な時期、この歴史的な刻一刻に当たって、勇敢にその血を流してきた、多くの生命の犠牲のおかげで勝利を決めた超人的な英雄主義の原動力であった、イベリア半島アナキスト連盟は、やはり、ラジオを

聞いている大衆に、その声を伝えることを必要としている。

同志たちよ！ いっそうの努力を。勝利はわれわれのものであろう。われわれは、われわれがすでにその中で七日間を過ごした、歴史的緊迫を持続しなければならぬ。憤激と熱情とでいっそう強力になったわれわれは、不敗である。反ファシスト第一部隊は、勝ち誇ってサラゴサに進軍した。熱狂した無我夢中の叫びがそれを迎えた。解放された町々の人々は、サラゴサを占領しにいった、バルセロナの勇者たちと合流した。サラゴサで叩きのめされたファシズムは、致命的な打撃を受けるであろう！

勝利を渴望して一緒に進む時、すべてをなしうる、大衆の至上の意志は、世界の人々にとって偉大な模範と映らなければならない。それは、われわれがなしうることと、われわれが望んでいることを示し、われわれの決意とわれわれの抵抗を知らしめなくてはならない。それはまた、世界の運命に影響を及ぼすであろう。われわれは、われわれが生きている決定的な瞬間を理解している。われわれは、平静さと誠実さをもってわれわれの同盟者の傍らで闘っており、同盟者に対してわれわれは、同じ誠実さ、同じ責任感、勝利への同じ英雄的な意志を要求している。バルセロナのあの偉大な志がたい日々、にわれわれを支えたあの意志を。

武器をとった諸君よ、男たちと女たちよ、この上なく

燃える熱情に動かされている民兵の諸君よ、戦士たちにパンと軍需品を確保するために人知れず働いている無名の英雄である諸君よ、諸君は、ナポレオンがピラミッドの前で、あの有名な言葉の中でいったように、△二十もの世紀がわれわれを見つめているの忘れてはならない。全世界がわれわれの行動を監視している。われわれは、協同した無敵の力であることを知らう。同時に匹敵するものない勇敢さとあらゆる面の公正さの、模範とならう。仲間たちよ、戦列につけ！ ファシストの怪物を完全に粉砕しよう！ 七月十九日は新しい時代の始まりを印した。過去の平和はもはや存在しない。われわれは、血の潮の中で新しいスペインを建設するのである。革命の象徴、自由への熱烈な欲求の旗印、FAI万歳！ 反ファシスト闘争の戦線万歳！

FAI半島委員会

- 1 『革命的サンジカリズムと共産主義、ビエール・モナット文書』(一九六九年)を参照せよ。
- 2 ホセ・ペイラツ『スペイン革命中のCNT』二巻(一九五八年)からの抜萃。

ドゥルルティイ (1896-1936) と絶対自由主義戦争

ブエナビントウーラ・ドゥルルティイ¹⁾

ブエナビントウーラ・ドゥルルティイ・イ・ドミンゴ、鉄道員サンテイアゴとアナスターシャの息子は、一九〇六年七月十四日にレオンで生まれた。

五歳の時、彼は小学校に通い、そして、九歳の時、リカルド・ファンフル先生が指導していた、ミセリコールディア街の中学校に通った。先生が、彼の修学の終わりにドゥルルティイに与えた評価は、「文学の才能のある、注意の散漫な、しかし高貴な感情を持つ生徒」であった。

十四歳の時、彼は、徒弟としてある機械工場に入り、十分な教育を受けたのち、十八歳でそこを離れる。その教育がよかったことを、彼は、トーリオのマンタリヤーナで初めて働き、洗鉱機を組立てながら実証する。それ

3 Angel Pastana (1886-1937) 時計工、冶金工労働組合書記から一九一四年にCNTの全国書記となる。サルバドール・セギとともに、彼は、一九一六年から一九二三年の間スペイン・アナルコ・サンジカリズムの高揚の礎となっていた。一九三一年以後、CNT内における、△二十人派と呼ばれる改良主義の潮流の中心の活動家、そして除名される。彼は一九三四年にサンジカリスト党を創立し、一九三六年に同党の代議士となる。病死する。

4 Salomon Lozovsky (1878-1932) 労働者、一九〇三年にボリシェヴィキ、一九〇九年に亡命し、一九一七年までフランス労働運動の中で活動する。織物労働組合の指導者、そこで彼は、反対派の組合活動を指導する。一九一九年以来、卑屈な大勢順応主義に属する。一九二二年から一九三七年まで、赤色労働組合インターナショナル議長。ホセ・ペイラツ、前掲書、よりの抜萃。

6 Armando Borghi (1892-1968) アナルコ・サンジカリストの中央組織、イタリア労働組合同盟の書記長。一九二〇年にソヴェト・ロシアにゆき、そこでレーニンと会う。彼の最も重要な書物は『アナキーの半世紀(一八九八-一九四五年)』である。

8 A・スーチー『共有化、スペイン革命の建設的な事業』(一九三七年四月、一九六五年再版)からの抜萃。スーチーについては、一三三ページを見よ。

から彼は、機械組立工として北部鉄道会社に入る。第一次世界大戦が勃発した一九一四年にはそこで過ごしている。

レオンが聖職者と貴族支配の一中心地であったにもかかわらず、そこにはすでに、スペイン社会党と労働総同盟の労働者たちの一つの核が存在していた。ドゥルルティイは、サラリーマンになった日から、労働総同盟に属していた。彼をつねに不正に立ち向かわせようとする、彼の叛逆的な性格は、つねに仕事仲間彼の真価を認めさせ、鉱業の中心地の中で、彼を人気あるものにしていった。彼は、組合の集會に参加し、彼の活動家的な闘争的な氣質を養った、職場について語った。この時期に、一九一七年八月の革命的なストライキが起り、それは、レオンでは、労働者の解雇と指導者の弾圧によって終わった。全国労働連合のレオン支部は、やはりこのストライキの中から生まれた。ドゥルルティイは、その人々の